



TITLE:

きらめく動物たちの命と海:久保田  
信の白浜だより(その10)

AUTHOR(S):

久保田, 信

---

CITATION:

久保田, 信. きらめく動物たちの命と海:久保田信の白浜だより(その10). うみひろも 2011, 84: 23-25

ISSUE DATE:

2011-08-17

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180232>

RIGHT:

© 海の生き物を守る会

## 4. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その10)】

### 大形タカラガイ類の打上 一田辺湾は世界分布の北限

2004年7月22日、白浜町臨海の北浜に、珍しいホシダカラガイの貝殻が打ち上がった。殻の大部分が欠けていたが、口側と周囲は残っており、長さが95 mmあって、成貝であった。タカラガイ類は、熱帯や亜熱帯の海の代表である。つやのある色模様の貝殻は、まさに自然の芸術品である。安産のお守りとして使われたこともあり、子安貝とも呼ばれる。平安時代初期に書かれたSF『竹取物語』で、かぐや姫が出した難題の一つ『ツバメの子安貝』は有名な話だ。

タカラガイ類のほとんどの種は小形で、人の爪くらいのもが多い。ホシダカラガイは田辺湾産の最大種で、貝殻の長さは10 cmほどに達する。これほど大きなものなら、多数見つかってもおかしくないが、ここでは稀にしか捕れないのは、生息数がかなり少ないからだろう。田辺湾周辺海域でのホシダカラガイの記録は、1974年以降の25年間でわずか13個体しかないことを、瀬戸臨海実験所元職員の田名瀬英朋さんと樫山嘉郎さんの3人で、南紀生物41巻(1999年)に報告した。これまで報告した成貝はたった2個体だけだったので、今回の発見は貴重な記録となった。各地での調査から、ホシダカラガイは三浦半島以南で記録されているのだが、成貝の分布の北限は田辺湾であることが分かった。しかも、この種の分布の世界の北限ともなっており、貴重な記録なのである。

#### ▲生きたタカラガイ類の軟体部の不思議な形

北浜には田辺湾周辺海域に生息するタカラガイ類の大半にあたる20種余りが打ち上がっている。本場の沖縄だと、この倍以上の種類がいる。世界中では200種ほどが知られるが、そのほとんどがインド・西太平洋に生息している。南西諸島などに行くと、生きたホシダカラガイが観察できる。生体では、軟体部の外套膜がすっぽり貝殻を被うので、一見するとこの種だとはわからない。一般にタカラガイ類の外套膜は突起だらけで、貝殻の色彩とは無関係な色合いと模様が入る。特徴ある貝殻を外套膜で隠したホシダカラガイは、生きている時を知っていなければ、一見すると大きなウミウシ類としか見えないだろう。

タカラガイ類の外套膜は、貝殻の背中側中央で両側からあわさるのだが、巻貝類でこの

ような特徴をもっているものは稀で、マクラガイ類くらいである。このようなむきだしの外套膜は、貝殻をだんだんと上塗りするので、厚くて丈夫なつややかなものに仕上げてゆく。真珠貝やアワビなどを除き、どのような貝殻のつやつやと磨かれた内側よりもタカラガイの貝殻は美しい。

タカラガイ類は、軟体動物の中では巻貝類に属するのだが、成貝の貝殻を見ても、「どこが巻貝なのか？」と思ってしまう。しかし、幼貝を見ると納得するはずだ。大きな口が広がり、普通の巻貝の形をしている。逆に、これほど形に差があるため、親子関係を知らないと種が確定できなくなる。元瀬戸臨海実験所職員の森山惣一さんが、1980年11月19日に、円月島の近くで生きたホシダカラガイを捕獲した。この貴重な幼貝は、同実験所的水族館で飼育したものの、翌1981年1月6日に死亡した。ホシダカラガイは南方系の貝なので、野外と同温の水槽では、当時の冬季の低水温に耐えられなかったからである。

### ▲タカラガイの生活史

タカラガイ類の生活史の概略はほぼ分かっている。雌親が卵嚢を岩の裏などに産み付け、孵化するまで守っている。よく知られているように、タコの雌親が卵塊を守るのと同じ母性愛を示す。手厚く保護されたタカラガイの卵は、丈夫なカプセル内で発生を進め、羽のような面盤をもち、蝶の様な姿のペリジャー幼生に成長する。この小さなプランクトン性の幼生は卵嚢から海中に出て、海流に乗って分布を広げる旅に出る。ホシダカラガイも遠く南西諸島の亜熱帯の海底で生まれ、黒潮に乗って紀伊半島沿岸にやってきているはずである。だが、海底に落ちていてせつかく小さな貝に育っていても、冬季の水温が低い年には凍死してしまう。北限分布の海域ではこのような盛衰は否めない。これまで田辺湾周辺で発見されたホシダカラガイ 13 個体のうち 2 個体の幼貝は、1976 年の寒波で死亡したものである。その年の 2 月に北浜で発見されたのだが、1 月下旬に海水温が 11 度まで低下したため、28 種 1325 個体ものタカラガイ類が大量死し、この中に混じっていた。

田辺湾周辺でホシダカラガイの生きたものを発見するチャンスは少ない(図)。南紀生物誌 41 巻で報告した通り、過去にはたった 3 個体の幼貝だけが生きたまま捕獲され、あとは死んだ殻ばかりである。1 個体だけだが、貝殻の中に腐臭がする軟体部がまだ残っている幼貝もあった。このような状態での記録も生息を記録する重要な証なのである。



図. 和歌山県白浜町のシンボル・アイランド、円月島のすぐ前の岩礁で、2008年9月13日に発見されたホシダカラガイの成貝